



2017. 7. 31

No.202

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

まだ伝えたいことがあるー「銀河通信」が29周年に



写真：7月9日、赤岳から見る残雪の旭岳と後旭岳

真夏日が11日も続き、北海道では23年ぶりの猛暑でした。我が家は扇風機も使っていないので、家族が体調を崩しました。そのため共謀罪の行方が気になりながら、反対する集会やデモには参加できませんでした。

異常気象のせいかな今年も災害が多いですね。7月1日の深夜、激しい揺れの地震で思わず悲鳴をあげました。震度4ぐらい？もっと揺れたように思いました。

翌日のニュースで震度3と知りました。震度3で恐怖を感じたのですから、東北の震災時の怖さは表現できないです。福島原発で津波対策を講じて来なかった東電の責任は大きいと思います。今も約6万人が故郷の福島に帰れずにいます。絶対に安全な原発はあり得ません。

東電元会長らの責任を問う裁判に注目しています。同時に、すべての原発は廃炉にしてほしい。北海道はほとんどの地域が泊原発の風下になり、札幌や近郊の市民はどこに逃げたらいいのでしょうか？

泊原発の廃炉訴訟も早6年目です。地震で、東北の大地震を思い起こした人も多いと思います。泊を廃炉にするには市民の大きな声が必要です。泊訴訟のときには、私も呼びかけますので、是非傍聴してください。

共謀罪が7月11日に施行されました。その日のLITERAの記事を引用します。

「きょうから、この国では内心の自由、表現の自由が踏みにじられるようになるー。本日7月11日、国会で採決されたばかりの共謀罪が施行された。[略] / いや、共謀罪施行前から『予行演習』は行われていた。その一例が、沖縄で基地反対運動の先頭に立ってきた、沖縄平和運動センター議長である山城博治さんの不当逮捕・拘留だろう。/ 山城さんは有刺鉄線1本を切断した器物損壊で逮捕され、その後、傷害と公務執行妨害の容疑で再逮捕。どう考えても任意の事情聴取を行うのが筋の事案だが、なんと約5ヶ月も拘留され、接見さえも許されなかった。この国家による暴力と呼ぶべき人権問題に対しては、国連の表現の自由に関する特別報告者であるデービッド・ケイ氏が『不均衡な重い罪を課している』と指摘する報告書を国連人権理事会に提出している。/ 共謀罪の取りまとめ役となっている自民党法務部会長である古川俊治参院議員は、共謀罪法案が審議されている段階から、沖縄で起こっている基地反対などの市民運動も「組織的犯罪集団として認定される可能性はある」と、『羽鳥慎一モーニングショー』の取材で明言していた。国策である原発や基地建設に反対し運動に参加しただけで“国の敵”と扱われ、組織的犯罪集団として逮捕される。そうした全体主義国家にきょう、日本は“なった”のだ。」

自由に発言したり行動できない社会は、息苦しいです。勇気をもって不当なことには声をあげ続けたい。



写真・6月下旬、野幌のノハナショウブ群生地は近隣住民が長年にわたり保護・再生してきた貴重な場所です

講演「反差別、反ヘイト、自己決定権を問う」を聴いて



6月30日に講演「反差別、反ヘイト、自己決定権を問う」がありました。主に外国人労働問題などをテーマに、取材活動をされているジャーナリスト安田浩一さんは、「日本は少数者の意見を封殺してきた。障害者や沖縄、アイヌなど。ヘイトスピーチがなぜ許せないのか。それは在日など、その人の属性を攻撃するからだ。だから傷つけないマジョリティが前面に立って闘わなければならないんです。ヘイトスピーチする側に、あなたの敵は在日でもコリアンでもない。私だ。そうすれば社会は変わるんです」と舌鋒鋭く発言。なぜ私たちが闘わなければならないかがとても理解できました。

アイヌアートプロジェクト代表の結城幸司さんは、「札幌の中学で道徳の授業で話す事がある。「ある生徒が『私の家では先祖代々アイヌと関わってはならないと言われてきた。だからアイヌは嫌です』ドキッとした。」と言いました。差別のタネはまかれています。最近イランカラッパということばが氾濫しているが、違和感がある。アイヌは文字を持たない民族であなたの心にふれさせてくださいという意味を知っているのだろうか？」と発言しました。

また琉球新報の記者宮城隆尋さんは、琉球人骨問題を記事にした時に、北海道で、結城さんや小川隆吉さんなどにも取材したと述べ、「琉球、アイヌ両民族には類似点がある。土地や資源、文化が奪われ、固有の言語が奪われた」と述べました。

琉球大学教授の島袋純さんは「警察が沖縄の基地反対派を『土人』と呼んだとき、政府は差別ではないと閣議決定した。これは放送禁止用

語です。公的に認めてしまったから大阪市内のトイレに朝鮮人と沖縄人をポアするという落書きが出るようになった」と話しました。

叔母はアイヌ民族の血を受け継ぐ男性と結婚しましたが母（私の祖母）は猛反対したと聞きました。その後和解しましたが、今でも差別はなくなっていないことを結城さんのお話を聴いて考えさせられました。

安田浩一さんは「ネトウヨ」とされる在特会取材した『ネットと愛国』（講談社）で2012年の講談社ノンフィクション賞を受賞しました。『沖縄の新聞は本当に「偏向」しているのか』などの著書があります。

日本ジャーナリスト会議北海道支部が主催しました。あまり知られていなかったのか、参加者が少なかったのが残念でした。



7月7日、札幌市資料館に近い大通西12丁目の目の覚めるようなバラ園が見事でした。市民の憩いの場になっています

2001年(平成13年)1月1日 月曜日 享月 日 葉斤 閏

ミニコミ通し 平和の尊さを

臨床検査技師
樋口 みな子

(北海道江別市 51歳)

二〇〇〇年も後わずかという時に、日本国憲法草案の人権条項を二十二歳の時に書き、男女平等のために闘ったアメリカのベアテ・シロタ・ゴードンさんにインタビューする機会がありました。

私も子育てとの両立に悩みながら、今まで仕事を続けてきました。憲法を変えようとする動きに「平和憲法は世界に誇れるもの。特に命を生み育てる女性に平和を切望しています」と、女性が声を出していくことの大切さを話されたのが、印象的でした。

私はささやかですが、自然保護と平和の尊さを伝える手書きのミニコミ「銀河通信」を発行して十二年になります。読者は百二十人。インターネットが普及している時代に「今どき手書きなの？」と驚かれる方もいますが、様々な活動を伝える写真も入れ、見出しも工夫して編集しています。たくさんの人に読んでもらうことは出来ませんが、手から手への作り手の思いが伝わるような気がします。

全国各地の市民運動の仲間や友人に郵送していますが、読んでの感想や近況を知らせる便りがたくさん届き、温かい気持ちになります。

「あなたの大切なことを続けて下さい」のベアテさんの言葉に励まされて、心に届く通信を新世紀も書き続けていきたいと思っています。



今号は記事が少なく、古い投稿を引っ張り出してきました。ベアテ・シロタ・ゴードンさんは日本国憲法第24条（家庭生活における個人の尊厳と両性の平等）の草案を執筆した女性です。私は2000年12月に取材する機会がありました。2012年12月に89歳で亡くなりましたが、「あなたの大切なことを続けて」という言葉を今も思い出します。

講演「朝日新聞のジャーナリズム」を聴く



7月29日「朝日新聞のジャーナリズム」について朝日新聞編集委員の北野隆一さん（写真）が講演しました。

かでの2・7の会場は早朝にも関わらず110人の参加がありました。主催は日本ジャーナリスト会議北海道支部です。

慰安婦問題をきっかけとして、権力と一部マスコミによる朝日バッシングから3年が経ちました。森友、加計、共謀罪の追及など、朝日新聞は蘇ったのでしょうか？

北野さんはジャーナリズムについて語りはじめました。

北野さんの考えるジャーナリズムは「人々が知りたいこと、知るべきことを読者に代わり記者が取材して伝えること」。北野さんは他の記者が敬遠するようなテーマ、朝日新聞が批判されるようなテーマこそ、自分にとってのフロンティアと考え取り組んできました。慰安婦問題や拉致問題、ヘイトスピーチなどがこれになります。

北野さんは日本の真ん中にいる多数派ではなく、さまざまな意味で「端っこ」にいる少数派の境界領域を取材し、日本人とは何か、日本社会とは何かを考えてきました。部落問題、在日コリアン、ハンセン病、水俣病、皇室など。

朝日新聞をお読みの方は、北野隆一さんの記事に注目して下さい。他紙も敬遠する、日本軍「慰安婦」問題を冷静な筆致で伝え続けています。植村裁判を支える会も応援し、東京裁判も必ず傍聴もされています。

現在、「てんでんこ」で皇室と震災との関わりを連載中です。

慰安婦問題と皇室。対極にあるような対象も色眼鏡なしで取材できるのがすごいいいと思いました。どちらもマイノリティだと。北野さんは皇室に対してもきちんと問題意識を持っていらっしゃるのです。

1時間という短い講演の中で詳しく聞けなかった新潟水俣病との関わりや在日コリアンとの関わりなど、次回お聞きしたいと思いました。

朝日新聞は首都圏で慰安婦報道や原発報道をめぐって、2014年9月と2017年4月に「信頼できるか」の調査を行いました。朝日読者はYESが2014年に3割強でしたが、今年の調査で6割弱に回復しています。

朝日は共謀罪の危険性を多くの識者にインタビューして、多角的に報道していて、治安維持法との相似が良く理解できました。

講演「核兵器禁止条約をめぐる世界の動き」を聴いて



7月29日「核戦争に反対する道医師・歯科医師の会」の講演会に参加しました。

長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子さん

（写真）が「核兵器禁止条約をめぐる世界の動き」について臨場感あふれる講演をしました。特定非営利活動法人ピースデポ（横浜）の事務局長として、核軍縮・不拡散問題に取り組んで来た方です。

7月7日に、「核禁条約」が採択されたニュースを覚えていますか？長崎新聞はトップで伝えました。しかし、唯一の被爆国でありながら、高見澤軍縮大使は「我が国として本件交渉会議に建設的かつ誠実に参加することは困難」と答え反対に投票したのです。この発言を聞いた各国の出席者から、ざわめき起きたと中村さんは伝えました。投票結果は賛成123カ国、反対は38カ国、棄権は16カ国でした。「日本はいったいどっちを向いているの？」と情けないと思いました。

今回の交渉会議の議長を務めたのは軍隊のない国として知られるコスタリカのエレイン・ホワイต์大使でした。「ナガサキを最後の被爆地に」の訴えをホワイต์大使は強く受けとめておられていたと語りました。

この条約は「核兵器のない世界の達成に向けた条約」と中村さんと言います。「被爆者の行動の積み重ねの上にこの原案がある」と指摘しました。

9月20日から各国の署名手続きが始まります。批准国数が50カ国に達した後、90日をへて発効しますが、批准しない国には効力がありません。条約推進国側には、核兵器の「非人道性」を強調することで国際世論を喚起し、核兵器の廃絶を後押しする狙いがあると中村さんは言いました。

ニュースで被爆者の藤森俊希さんと、カナダ在住の被爆者サーロー節子さんが握手する姿がありました。

世界中の核兵器を廃絶できたら、平和へ、大きな前進になりますね。とてもいいお話でした。

採択された「核兵器禁止条約」は日本の平和憲法に匹敵するものだと思います。

みな子の山旅日記



十勝連峰周辺を散策

6月22～23日、所属山岳会のスケッチクラブで十勝連峰を描こうと旭川方面に向けて7人で車2台に分乗して出発。

最初に訪れたのは上富良野の後藤純男美術館です。日本画家として著名ですが、油絵との違いは岩絵具を使っていることを初めて知りました。時間をかけて後藤画伯の絵画を鑑賞し、壮大な風景に感銘を受けました。



今にも雨が落ちそうでスケッチは諦め、地元で大雪山国立公園パークボランティア連絡会の代表をされているKさんに、知られざる名所を案内して頂きました。同じ山岳会のメンバーでもあります。



昼食後、上富良野の農機具伝承館「土の館」を訪ねました。1万年前の農耕の始まりから土を耕す道具が使われていました。鍬やスキ、プラウの展示、国内外のクラシックなトラクターが展示されています。私が最も気に入ったのが100年前のカナダのトラクター（上写真）です。思わず「赤毛のアン」の世界だ！と嬉しくなりました。田園風景によく似合いますね。この日は十

勝岳近くの前山に泊まりました。翌日も曇り。まず最初に行ったのは91年前の十勝岳の大噴火で、泥流は上富良野の原野にまで達した泥流地帯です。清楚にエゾイソツツジが沢山咲いていました。またハイマツの中にシラカバが共生していた姿（左上写真）に感動しました。90年かけてようやくシラカバが育ち始めたのです。さらに車を走らせ訪ねたのは美瑛町の深い森でした。「森の神さま」と名づけられたカツラの大木です。（上写真）樹齢900年の堂々たるたすまいから英気を頂きました。その側にはレイジソウやカラマツソウが咲いていました。



縮めくくりは東川町に昨年オープンしたばかりの文化芸術センターです。東川小学校を改装して素敵な施設になりました。1階は大雪山ライブラリーで、関連の書籍や写真、絵本などを自由に-



4-

4-



4-

手に取って見る事が出来ます。山好きな方には1日楽しめます。併設されたレストランのランチは600円と安くて美味しいです。

スケッチは出来ませんでした。地元民でないと行く機会がないところばかりで、感謝もひとしおでした。



樽前山登山

6月27日、支笏湖近くの樽前山に登りました。千葉からいらした方たちと一緒にしました。

6月27日快晴の樽前山（東山）頂上



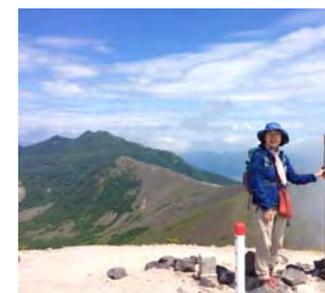
最高点のドーム（1042m）

していました。8時20分登山開始。展望台からは支笏湖が美しい。拓けた砂れきの道を登ると、夕張岳や芦別岳、恵庭岳などが見えてきました。タルマイソウ（イワブクロ）、イソツツジ、ウコンウツギがたくさん咲いていました。

登山道から外れた左斜面には、人によって持ち込まれたコマクサの群落がありました。植生を変えてしまいますね。登山口から50分で外輪山のピーク、東山頂上でした。羊蹄山や周辺の山が一望出来ました。そこからぐるりと回って西山に。西山に向かう途中で映画サークルのIさんに出会いました。風不死岳がすぐ近くに見えました。

風不死岳の登山口に正午少し過ぎに下山して登山を終えました。

外国の山のような樽前山は、好きな山の一つです。



西山頂上で後方は風不死岳

タルマイソウ（イワブクロ）がたくさん咲いていました



赤岳で高山植物パトロール



7月9日、午前3時起きして、登山口の赤岳銀泉台に集合。高山植物の保護活動に長年取り組んでいる上川総合振興局の環境生活課、環境省、上川自然保護官、森林管理署、私の所属する日本山岳会北海道支部の合同パトロールです。

10人で登山口を8時15分に出発。銀泉台はすでに標高1500m。厳しい登りが続きます。高度を上げて雪渓をトラバースして登ると第一花園につきました。

コマクサ平まではまだまだ厳しい雪渓歩きが続



きました。山も暑かったですが雪渓は清涼剤でした。コマクサや(写真左)メアカンキンバイの可憐さにしばし憩い最後の斜度の厳しい雪渓を超えると、赤岳頂上(11時10分)でした。赤岳から下山する登山者に、パンフレット

を配り啓発活動をし、小泉岳まで登り帰りはのんびり高山植物を楽しみ、登山口午後3時半でした。

赤岳や、周辺登山道ではチングルマ、ミヤマキンバイ、メアカンキンバイ、アオノツガザクラ、エゾツガザクラ、イワヒゲ、コケモモ、エゾコザクラ、ホソバウルップソウ、キバナシオガマ、イウウメ、チョウノスケソウ、チシマキンレイカ、エゾノハクサンイチゲ、ヨツバシオガマ、エゾタカネスミレ等が満開でした。



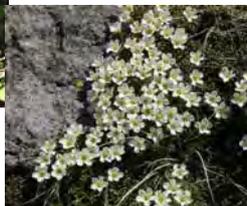
チョウノスケソウ



キバナシオガマ



エゾコザクラ



イウウメ



チシマキンレイカ



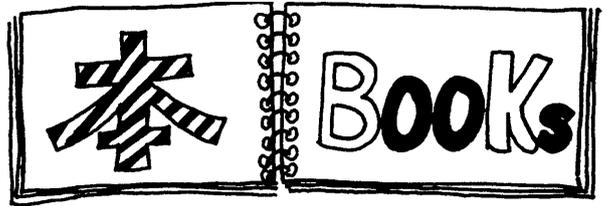
エゾノハクサンイチゲ



エゾタカネスミレ



メアカンキンバイ



北星学園大学バッシング
市民はかく闘った

「負けるな北星!の会」記録
編集委員会 500円
2014年春から2年近く
北星学園大学と植村隆さん、

そして植村さんの家族にも及んだバッシング
に対して闘った市民の行動の全容が記録されて
います。

本文で何人かの方が指摘していますが、北星学園大学の学生にはこの事件はあまり知られていなかったことがとても残念です。学生にアンケートに答えてもらおうと、「なぜバッシングされたのか植村先生から説明して欲しかった」「闘っている人たちが大勢いる。私は学生と先生たちによるギャップが問題だと思う。慰安婦報道のニュースは学生と大学をむすぶチャンスだと思う」と意見が寄せられています。ノーマ・フィールドさん(米シカゴ大名誉教授)は「未来に呼び掛ける闘いだったか」の文章の中で焦点は「慰安婦」の事実であると述べています。中身を議論せず言論や学問の自由を擁護するとはどういうことだろうか指摘しています。慰安婦問題についての議論は避けたいという朝日新聞の姿勢もあったし、植村さんは学生に説明したいという希望を持ちながら実現はできませんでした。ノーマさんは「これは日本だけの問題ではない。各地の大学で、軍隊と戦争と性の問題を教室で論じて欲しい。いまからでも遅くない」と結んでいます。私のもやもやした気持ちはこの言葉に集約されていました。

韓国カトリック大学からの留学生、姜明錫(カン・ミョンソク)さんの「丸く収める『あいまい決着』に失望」という文章では、大学への痛烈な批判が胸にさざりました。

報告集には「孤立感にさいなまれた。新聞は息を潜め沈黙した」(田村信一北星学園大学長)「記者抹殺を狙う異様な攻撃」(週刊金曜日編集部小林和子さん)「閉塞の出口求める言語暴力」(内海愛子恵泉女学園大名誉教授)といった関係者の意見、市民の立場からの意見も多数掲載されています。私も拙文を寄せました。経過年表、脅迫の実態、シンポジウムや集会の記録、賛同人1346人の全氏名、資料(支援声明・アピール・要請書・決議・抗議など)も掲載しています。ご注文は、〒番号、住所氏名、お買いになる冊数、電話番号をお書きのうえ、makerunakai@gmail.com かファクス 011-351-531



知らなかった、ぼくらの戦争

アーサー・ビナード編著
小学館 1500円+税

2015年の戦後70年から「戦争が繰り返される仕組みとはいったいなんなのか」と詩人のアーサー・ビナードさんは、全国各地を回って、23人の戦争体験を収録しています。ラジオ番組のタイトルは「探しています」。

太平洋戦争体験者たちを訪ね歩き、戦争の実態と、個人が争いから生き延びる知恵を探ります。

登場する語り手は、真珠湾攻撃に参加したゼロ戦の元パイロット、「毒ガス島」で働いた元女子学徒、戦後GHQで働いた元事務員など。

日本社会に詳しいビナードさんが、自身の受けたアメリカの教育とも照らし合わせながら戦争に対する考察を深めます。ビナードさんは日本に来て20年。詩人として活躍していますが、その間に自分がアメリカで学んできた定説への疑問が生まれました。大日本帝国は予告もなしに、アメリカ・ハワイ州真珠湾に奇襲攻撃をかけたのだろうか？原子爆弾の投下は戦争を終わらせるために必要かつ正しかったのだろうか？アメリカの教育で学んできたことは正しいのか？と時とともに疑問がふくらんでいったといいます。

まず最初に取材したのは義母（詩人・木坂涼さんの母）の体験談。インドシナを支配下に置いた政府からの贈り物は「戦争に勝つとゴムマリが来る」と喜ばせました。マリを政治利用したのです。

真珠湾攻撃に参加した原田要さんは「米軍はすでに大事な空母を避難させていた」と語ります。アメリカでは「日本の卑怯な真珠湾攻撃」として語り伝えられてきましたが、原田さんはその疑問を見事にあぶりだします。

戦争でニューギニアに赴いた西村幸吉さんは、60歳を過ぎてから現地に帰り、遺骨収容を続けました。「遺骨収集」ではないと痛烈に批判しました。

アメリカ生まれでアメリカ育ちながら開戦とともに強制収容所に送られた人、二歳で満州に渡り敗戦の混乱をようやく生きのびて帰国した人、オンボロの疎開船で九死に一生を得た人、広島島の爆心地から2キロの家でピカに遭った人、長崎の原爆被害者、その長崎以後にもアメリカ軍原爆投下部隊の訓練を明るみに出した人などが、戦争の真実を語っています。

安倍首相の真珠湾訪問と、オバマ大統領の広島訪問がセットで売り込まれたのだとビナードさんは鋭く批判しています。当時、メディアも好意的に取り上げていましたね。

しめくりにアメリカの詩人の「平和」の定義が紹介されています。「平和とは、どこかで進行している戦争を知らずにいられる、つかの間の優雅な無知だ」。70年続いた戦後日本の平和は「優雅な無知」なのかと問われたように思います。どの証言からも、平和な未来につなげようという思いが伝わり、感動しました。



語り継ぐハンセン病 —瀬戸内3園から

山陽新聞社編
山陽新聞社 1800円+税

すべてのハンセン病患者を隔離して、療養所に閉じ込めてしまおう、らい予防法が1996年に廃止されてから20年が過ぎました。国の政策の誤りを認定した2001年の熊本地裁判決が確定してからも16年です。

私がハンセン病にかかわるきっかけになったのは、青森にある松丘保養園に取材に伺った縁からでした。北海道から、貨物列車に乗せられ、青函連絡船の船底に収容されて、海を渡った体験談に「こんな人権侵害があっただいのか！」と怒りで震えました。各県が競ってハンセン病患者を見つけだし、強制的に入所させるという「無らい県運動」が全国的に進められた事実をそれまでまったく知りませんでした。

5月にハンセン病市民学会が瀬戸内3園で開かれ、詩人の塔和子さんが亡くなるまで暮らした、大島青松園を訪ねたいと参加しました。

銀河通信201号には紹介しきれなかったのですが、大島青松園の周辺を見学した時、海岸に投棄されていたのを引き上げて展示されていた解剖台を見た時のショックを思い出します。その現場をみつめた入所者の怒りと悲しみはいかばかりだったか？と言葉を失いました。

本書は、取材エリアの瀬戸内に三つのハンセン病療養所を抱える山陽新聞が、回復者の方々からの粘り強い聞き取りをもとに79回にわたって連載したものをまとめています。

入所者の高齢化が進み、隔離政策の被害、差別の歴史といったハンセン病問題の重要な証言者が次々と亡くなって行く中、問題の風化を防ぐために、入所者の貴重な証言を記録し、ハンセン病問題の「今」そして「未来」を問い掛けます。

巻末にハンセン病関連年表、ハンセン病関連主要法令集などを資料編として収録していてハンセン病の歴史がわかります。

偏見と差別はむしろ私たち一人ひとりの心のなかにあるのではないか、だとすればハンセン病の今を伝え続けなければならない。地域に根ざすメディアの使命感、気概が伝わってくる優れたルポです。



チャップリン 作品とその生涯

大野裕之著
中公文庫 920円+税

著者はチャップリン研究の第一人者として知られています。何といっても400巻にも及ぶ

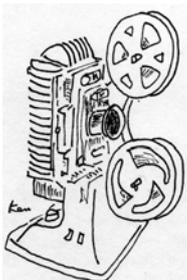
NGフィルムを全て見たというのがすごい。

「街の灯」「独裁者」「ライムライト」等の名作から幻となった遺作「フリーク」まで、喜劇王が作品に込めたメッセージを読み解き、知られざる実像に迫った評伝です。

著者とチャップリンとの運命的な出会いは小学4年の時に見た「独裁者」でした。著者はあとがきに「コインの入ったプディングを食べるシーンに爆笑し、ヒトラーを模した鬼気迫る演技に戦慄を覚えた。そしてラストの演説が終わった時は涙が止まらなかった」と書いています。

著者はNGフィルムをみて、チャップリンがいかに撮影から編集に至る過程で、いい映像にするために工夫をこらしたかを検証しています。チャップリンの笑いとペーソスには、権力への怒りや弱いものへのやさしさがどれだけこめられていたかが、伝わってきます。チャップリンが「独裁者」の中で観客に向かって訴えるシーンはまさにたった一人で、平和への闘いを、フィルムに焼き付けたのです。「独裁者」でアメリカを追放されたことは有名です。その時チャップリンは「共産主義者か」と問われて「世界市民です」と答えています。

「世界は混迷を深めている。そんな時代だからこそ、あくまでも自由なチャーリーと、悲しい時は一緒に泣いて、どん底にいる時でも笑顔を忘れないでいたい。そして、社会の不条理に抗して闘うことのできる唯一の武器とは、あの愛に満ちた笑いであるということ思い出したい。—そう、今こそ私たちには、チャップリンの、あの温もりのあるユーモアが必要なのだ」。このあとがきに泣きました。チャップリンのそれぞれの作品の解説が素晴らしいです。「独裁者」もいいけど私は「ライムライト」をもう一度観たい。



残像

アンジェイ・ワイダ監督



舞台は1950年代、ソビエト連邦の影響下におかれていたポーランドです。

スターリンの全体主義に脅かされ、芸術家たちの自由な表現が制限されていきます。前衛画家ストゥシェミンスキは、国家の圧力に屈せず命がけで自らの芸術を守るために闘うのです。大学では美術教育にも情熱を傾け、たくさんの学生に敬愛されました。

草原を松葉杖をものともせず転がり下りてくるストゥシェミンスキは、何ものにも捉われない快活さを見せて、一番好きな場面でした。しかし、のどかな時代はかき消されて行きます。国は社会主義リアリズムだけを芸術だと、前衛芸術を否定。大学を追放され、芸術家協会からも除名されるのです。身分証がないと、絵の具も食料も買えなくなります。支援する学生たちが、今までの講義録をまとめたり、仕事先を紹介したりと奔走し、光が差し込みます。

ストゥシェミンスキの作品は全て撤去され、破壊されるシーンが無惨。それでも体制に屈することなく、表現の自由を求めつづけ、信念に生きたひとりの芸術家の生き方に涙を禁じ得ませんでした。

ワイダ監督自身も画家を志していたそうです。ストゥシェミンスキとの出会いがあったのかも知れません。

個人の内面は何者によっても侵されない。ストゥシェミンスキは譲ることのできない信念を貫きました。共謀罪が成立し、表現の自由が奪われようとしています。この映画で描かれた事実は、今の時代への異議でもありません。ものを見ると残像が映ります。私たちはこの「残像」を心に刻まなければと思いました。アンジェイ・ワイダ監督の最後のメッセージです。

ローマ法王になる日まで

ダニエル・ルケッティ監督

2013年3月、



ローマ法王に就任したフランシスコはザンピエトロ広場に集まった20万人の信徒に歓迎されました。

映画は、アルゼンチンの心優しい青年ベルゴリオ（後のフランシスコ法王）が、史上初のアメリカ大陸出身のカトリック教会長になるまでの半生を描いています。

ベルゴリオはブエノスアイレス生まれのイタリア移民2世です。1973年イエズス会アルゼンチン管区長になりますが、1976年から1983年まで、独裁政治に人々は苦しめられます。政府に批判的な宗教者や、多くの市民が密告などで弾圧されました。その数3万人というのも驚きました。つい、この間まで独裁政治があったことを知りませんでした。その残虐な行為は目を覆うほど。あまりにも容赦のない殺害に、目を背けるほどでした。ベルゴリオは、彼らをなんとか救おうと奔走しますが、教会は協力的ではありませんでした。映画はベルゴリオを特別な英雄として描いてはいません。自分の無力さに涙を流す人間的な人柄や、その苦くて悲しい体験から毅然とした庶民派の聖職者へと成長していった姿を丁寧に描きます。

ある時、貧民街で住民の立ち退き問題が起きます。建物を取り壊そうとするのをベルゴリオは、教会のトップに掛け合い、市と交渉するのです。住民の前に立ち、取り壊そうとする建設業者と渡り合う場面がありました。常に一番弱くて困っている人に心を寄せる姿に胸を打たれました。貧しい女性が「マリアさまが苦悩の結び目を解いてくれる」というと、ベルゴリオは涙を流します。人々の心に寄り添う姿に感動しました。人間性あふれる法王に会ってみたいです。



オリーブの樹は呼んでいる

イシアル・ボジャイン監督 ポール・ラヴァーティ脚本

スペインのバレンシア州。養鶏場で働くアルマは祖父と樹齢2千年のオリーブで遊んで育ちました。不況で、父がその樹を売ったことで、心を閉ざしてしまった祖父のために、オリーブを取り戻そうと計画します。叔父と同僚を丸め込み、アルマはなんの計画もないまま、無謀な旅を決心します。スペインからドイツまでの道中もいろいろなことに出くわします。

アルマの大好きな祖父への思いと、オリーブへの特別な思いが痛いほど分かりました。私も山の上の大きなリンゴの樹の下で遊んだこと。祖父が農家で馬が好きだったことなどを思い出しながら観ました。多くの人が大樹から励ましをもらって生きてきたのではないのでしょうか。気が強くて扱いにくいけど、アルマの純粋さに叔父も同僚も家族も、友人たちもいつの間にか協力して、オリーブの樹を取り戻そうと奔走する温かさが良かったです。

アルマの旅の目的を友人らがインターネットで流すと、ドイツの大会社のロビーに置かれたオリーブの前に、多数の市民が集まり、抗議の声をあげます。アルマの意識も変化していき、大地に根づくオリーブの声を聴く姿がありました。

6月に樹齢900年のカツラを見る機会があったこと。10数年前に「北大のハルニレの大樹を切らないで」と運動したこと。夫が札幌市内のS中学に勤務していたころ、「校門前のアカマツの大樹を切らないで」と職員室で訴え、伐採を止めたこと。思い出すことがたくさんありました。記憶を呼び戻してくれる映画ってステキですね。

購読料と寄付ををありがとうございます
(敬称略) 6.3~7.21

高橋雋/築田敬子/新妻徹/大井恵子/安田成男/山川陽一/菅原三栄子/尾寄弘子/吉根由紀子/岡田弘隆/土本武司/福田光子/但馬桂子/高橋明子/塚本裕子/後藤誠二/成田明/芳賀淳子/中川充/渡邊圭/蓬田三枝子/野村保子/瀬尾英幸/小澤登美栄/合田美津子/大関裕美子 合計86,000円は印刷、送料、封筒、名前ラベルなどに使わせていただきます。ありがとうございました。

ふたりの桃源郷 佐々木聡監督

山口県のローカルテレビ局が山中に畑を開いて暮らす老夫婦と、街に住む子や孫たち家族の姿を25年にわたって撮影したドキュメンタリー。断続的に長



年放映されたテレビで、数々の賞を受けました。まとめて1本の映画になりました。

山口県岩国市美和町の山奥で暮らす田中寅夫さん・フサコさん夫妻。二人が、電気も電話も水道も通っていないこの山で暮らすのには、ある理由がありました。山は、戦後まもなく一からやり直そうと自分たちの手で切り開いた大切な場所。高度経済成長期に大阪へ移住し、三人の子どもたちを育て上げた寅夫さんとフサコさんでしたが、夫婦で還暦を過ぎた時、「残りの人生は夫婦で、あの山で過ごそう」と、思い出の山に戻り、第二の人生を生きる道を選んだのでした。これは並大抵ではありません。大阪や奈良に住む娘夫婦たちも心配します。80歳を過ぎて、山から車で30分の老人ホームに入るのですが、ふたりには物足りない。毎朝、夫婦で山に通っては畑仕事をし、マキを作り、お風呂を沸かします。厳しい労働でおばあちゃんの腰は曲がり、おじいちゃんの薪割りも大変。でもふたりに汗して野菜を作り、キノコを探すのは楽しくて嬉しいのです。支える家族もステキです。還暦になった三女と夫さんは大阪の家業をたんで、両親が住む岩国に、中古住宅を買って移り住みます。農作業が厳しくなった両親に代わって3女夫婦が山を守ります。野菜を作り、家族を支えてくれた両親の生き方をきちんと受け止める姿に涙が止まりませんでした。

私の祖父母の人生に重ねていました。電気はありましたが停電も多くて、ランプの灯りで、時代小説を読んでいた祖父の姿が浮かびました。お風呂も五右衛門風呂で、暗くて子ども心に怖かったです。

山の景色の素晴らしさ。自然と共に生きる夫婦愛。人間の尊厳とはと考えさせられました。ふたりは土に生き、自然に帰っていったんだなあと感動しました。

北大の「遺産」 老犬守って

臨床検査技師 樋口 みな子
(北海道江別市 51歳)

札幌に通勤する私は時々、緑豊かな北海道大学のキャンパスを散策します。ほっと安らぎを覚えるひとときです。その北大のポプラやハルニレなどの大樹十数本が、樹木医から「危険木」と判断されたとして伐採されようとしており、市民から反対の声があがっています。

ハルニレ(英語ではエルム)の多い北大キャンパスは「エルムの学園」とも呼ばれます。今回、伐採対象になっている四本のハルニレは樹齢三百年と推定され、校舎が造られたとき、あのクラーク博士らの努力で残されたものだそうです。まさに北大の歴史を伝える文化的遺産です。

危険木と判断されたのは内部に空洞が広がっていたためですが、木そのものは元気です。「安全」は大切ですが、自然との共生を考える中で、切ることが唯一の方策なのでしょう。車の乗り入れを制限し、周りの舗装を除くだけでも効果がありません。「エコキャンパス」構想を掲げる北大当局ならではの英知と英断を期待しています。

享月 日 期 2001年(平成13年)3月16日 金曜日 12版